〔倭訓栞前編十四多〕たまのを○中略　命の事にいふは、靈の緒也、

〔萬葉集七雜歌〕旋頭歌

撃日刺宮路行丹吾裳破玉緒念委家在矣、

〔新古今和歌集十一戀〕百首歌中に忍戀を　式子内親王

玉のをよたえなばたえねながらへば忍ぶることのよはりもぞする

〔倭訓栞前編三伊〕いきのを　命をいふ、万葉集に氣之緒と見ゆ、緒は玉のをなどいふがごとし、

〔萬葉集七譬喩歌〕寄花

氣緒爾念有吾乎山治左能花爾香君之移奴良武、

〔袖中抄十〕たまきはる○中略

顯昭云、玉きはるとは、たましひきはまると云を、まの字を略して云歟、されば命によせてよめる歌おほし、

たゞにあひて見てははみこそ靈剋命に向わが戀やまめ

かくしつゝあらくをよみにたまきはるみじかき命をながくほりする○下略

〔冠辭考多五〕たまきはる　いのち○中略

万葉卷五に、靈剋内限者平氣久、卷六に、靈剋壽者不知、卷十一に、玉切命者棄云々、此外さまく借字して書る多かれど、意は同じ、こは多麻は魂也、岐波流は極にて、人の生れしより、ながらふる涯を遙にかけていふ語也、故に内の限とも、息内とも、幾代ともつゞけたり、さるを後の人、命の今終る極みをいふとのみ思へるは、此冠辭の本の意にあらず、いかにぞなれば、右の靈剋内限者平氣久てふ歌の、憶良の自序に、瞻浮州人、壽百二十歳、謹案此數非必不得過此云々といひて、遙に百二十を、凡の生涯とするを合せ見よ、且言忌せぬ上つ世といへど、今死に臨むをいふ語ならませば、其人の名に冠らしめて